市民の声・座談会　俳句を語る……

自然を愛し、人を愛する

遊びの境地・豊かな人間性

俳句を通じて　裸のつきあい

■生きる上で、生活する上で、俳句がどんな糧になっているか、俳句このよきものということでお話し願いたいと思いますが。

▼句会に集まる仲間は、親せき以上に親しく家族的で、それが心強く、どこでやっても遠慮はいらないし、すぐ裸で話ができます。

私は夜中に種崎まで投網をうちに行きますが、独りでも少しも淋しいことはないですね。俳句をひねりながらゆくと、

■俳句につどう人が裸でつきあえるということ、生きる支えになっているということですね。

▼いかに年金、職業がちがっていても、俳句につどう時間というのは同じ目的のために、静かに考える時間があるわけですね。それが私は好きです。それぞれの個性が句に表われていましてね。ああいうふうに表現するんだな、と勉強になります。日常生活でも家庭内の和という点でプラスになるのではないかと思います。

▼人を知ることができますね。俳句を作っているとそれに集中して、思想、信条、社会的身分などに左右されずに、対等といっては失礼ですが、話が通じます。裸のつきあいができる、これは素晴らしいことだと思う。私は気が短かい方ですが、俳句を通じて長くなったというか――。（笑）

▼お話しを聞きますと、みな句会がなごやかだといわれますが、逆にいえば、そうでないと長く続きませんね。おそらくどこの会でも親せきづきあい、胸襟を開く仲だと思う。

▼家内も俳句をやっていてよく言うんですが、お前は終生のライバルだと。（笑）家庭の中へ職場をもちこんだりではおもしろくないわけで――。俳句が一つの清涼剤のような役割を果していますね。

▼昨年一月に片山で青年がなくなりまして、この時に皆がお通夜の席で追悼の句を捧げましたが、そういうようなことを、俳句を作っていない人も、ああ、俳句はいいものだな、と感心しておられたということを聞きました。

▼ことし二月に清風園に行きましたが、五、六人の方が俳句をまちかねておりまして、車いすにのって不自由な身体で一生懸命作っておられました。みなさんも機会があれば行ってあげたら喜ぶだろうと思う。

はげしい労働の中のやすらぎ

▼私は山南の句会へ行くんですが、あそこはほとんどが農家で、月に一回も休みがないというくらい働いているんです。せめて月一回の農休を、ということで俳句をはじめています。私は山北から山を越えて山南に出ますが、途中でみかんを作っている人が「私は、今日は句会へ出れないが、今でも句帳はもっています」といって目に焼けて働いているんですね。はげしい労働の中で俳句を作るのに生きがいを見い出しています。本当に感心します。

自然を見る目がかわる

▼俳句をやりだして、まず、自然を見る目がかわるということを皆いいますね。

ゆうべ蛍が恋するのを完全に見ましたね。（笑）蛍の光が、二つが一つになりましたからね。こりゃあ、と思って、家内に来てみい来てみい――。（笑）目を近づけるけれども光だけで姿は見えません。懐中電灯で見ると、八の字型になって恋をしているんですね。私、はじめて蛍の恋してるのを見ました。それからエロティシズム的な話になりましてね。（笑）それでも家内との和の一つですね。

ことによって人格形成

▼お話しの通り、まず第一に自然を愛する、ということが第一義で、次に人間関係がちがってくる。俳句というのは究極には十七字でいろいろのものを表現しなければならない。文字の上で表わすだけでないものを奥に秘めていなければならない。そういうことになると自分で作った句がいいか悪いか、わかりにくいんですよ。長年やっていても自選句集なんか出すと、「なんだ」と思うようなものがまじる。それをいかに克服するかということになると、自分を客観視するということが必要になってくる。自己客観という目を養うことによって、人格形成の非常によいたしになると思う。

俳句する人に悪人はいない

▼私は俳句をはじめてから田舎のお菓子屋をしている先生の所に習いに行ってたんです。そしたら『俳句やる人に悪人はいない』といって客の勘定をまかされたんです。昭和十八年ごろでしたか。『俳句やる人に悪人はいない』という言葉は、非常によい言葉だと思いますね。

〝余情で理解しあう〟ことに心ひかれて

▼私は子供の時から非常に閉鎖的で多感な性格だった。人前に出たり、物を言うのが嫌いな、臆病な性格だったので、いつのまにか、若い時から物を言わない人、だまっていてわかる人、余情でわからす、ということに非常に心ひかれて、十六の時から俳句を作ってきました。三十年近く俳句をつくってきて、究極的に思うのは、皆さんがすでに到達しておられる「遊びの境地」だと思うんです。遊ぶということの尊さ、それが人間を豊かにするし、ふくよかにするということが、今になってわかりかけた。

▼最近、俳句と人間性、社会性のかかわりをわりと思うようになったんですが、俳句のもっている沈黙性、象徴性、弁証法的な性格、それから読み下したとき、もう一度もとに帰ってくる輪廻性、というようなものが、いつのまにか、俳句と人間性を結びつけていると思う。

出席者

池禎章（岩村句会）西村ひとし（芽花の会―久礼田）高橋宏蘊（梵鐘会―国分）小松ふみ（若草句会―比江）公文東梨、大谷美恵（公民館俳句サークル）山本寿雄（大篠俳句教室）浜田波男（波―大湊、三和）楠瀬敦子（花おうち会―小田村）中村祭生、井上成喜（灯句会―稲生）杉本恒星（俳誌『壺』主宰―市長）広報委員

岩村句会・昭和二十九年一月、福船部落で、故大畠案山子さんを中心に「みずほ句会」として発足、だんだん大きくなり、三十一年十一月、岩村句会となる。月、一度の句会。以前、社会教育課から表彰。会員は十人内外。

梵鐘会・昭和四十二年に国分寺の前住職のご夫人、故林節子さんのお世話で四十二年の八月発足。希望ヶ丘学園長の岩城鹿水さん、付属中学の橋田慈明さんの指導を受けている。会員は十人くらい。『どういうわけか、小糠三合のないくちのものが多くて、梵鐘会というより、養子会と呼ぶ方がよい』とか。

若草句会・昭和三十八年に、西岡双島子さんが結成。女性ばかり九名。池禎章さんの指導。四十七年に、十周年を記念して、句集「忍冬」（にんどう）を出す。忍冬とは国分寺の遺跡の文様からとった名。句集発刊記念として、紀貫之邸跡に桜を植樹したり、史蹟跡の清掃などをしている。

公民館俳句サークル・昭和三十七年ごろ、川田十雨さんの奥さんの指導で稲吉を中心に発足。奥さんが亡くなられたのち公文東梨さんの指導。一昨年から公民館を借りて活動。十八人の女性会員。七年前に第一句集「柿の実」発行。桃栗三年、柿八年。柿は八年たたないと実がならない。柿のようにつややかな句を作ろうというところから「柿の実」と命名。一人でも落伍者を出さないように手をとりあって、がモットー。

大篠俳句教室・結成して三年。大篠小学校PTA俳句教室ということで、学校の先生、父兄を主体としている。先生が大部分をしめて父兄は四・五名。通信俳句の形式で、句会に出席するのは七、八人で、投句をする人が三十人以上。ホトトギス系の人もいれば、前衛の人もおり、バラエティーにとんでいる。

波・昭和二十三年三月二十五日、高知の共同通信の支局長をしていた浜田波川さん（現在「波」の発行者）を紹いて結成。当時、網引きが多かったので「あびき句会」と名づける。その時の仲間が下田村に大湊句会を作り、「あびき句会」と交流。現在、会場を三和に移して活動。会員十三人。

花おうち会・昭和三十八年六月に西岡双島子さんの指導で小田村に発足。二年ほどして西岡さん転勤の後、池禎章さんの指導。それまで通信句会の方法で、中村祭生、北村しげき、森武司、山本寿雄さんらに撰を願う。現在、若い主婦が中心で八人。それまで部落には文化活動がなかったが、句会ができて婦人部が各方面で活発になり、部落をリード。県から表彰されたこともある。

灯（ともしび）・戦後のすさんだ世相の中で、心に灯をともそうということで灯という名をつけてはじめる。故北村淙々子（そうそうし）さんを中心に毎月かかさず活動。最近、淙々子さんの句碑が建立。現在、中村祭生さんを中心に二十五人の会員。

芽花の会・昨年八月に「壺」の若い会員が中心になって発足。現在、会員が九名。毎月一回の句会。